

# 平成28年度学校評価

学校名	静岡大学教育学部附属特別支援学校
作成日	平成29年3月1日

重点事項 項目	本年度の成果	自己評価	学校関係者評価	来年度に向けて
学校の経営	<p>(1) 安心・安全な学校 ○児童生徒が安心して学校に行くことを楽しみにしていると答えた保護者、児童生徒が90%以上であった。 ○消防署や警察の協力を得て、防災、防犯訓練の充実が図られ、児童生徒並びに職員の意識が高まった。</p> <p>(2) 一人一人が伸びる学校 ○個別の教育支援計画、指導計画の様式を改善し、一貫性につながる活用に向けての取り組みを始めることができた。</p> <p>(3) 大学と連携し保護者や地域から信頼される学校 ○居住地校交流の参加人数が増えた。 ○地域住民との情報交換や広報活動により、行事等への来校者が増えた。</p>	<p>(1) 安心・安全な学校 ○学校評価アンケートにおいて児童生徒97%、保護者92%が「学校が楽しい」と回答した。 ○消防署や警察署と連携して非常時の訓練の充実を図ることができた。 ▲福祉避難所については具体化できなかった。 (2) 一人一人が伸びる学校 ○個別の教育支援計画、指導計画の様式を主事会で検討を重ね、活用しやすい様式を提案することができた。 ○それぞれの様式について改善した様式を提案し、次年度からの運用に向けて新たに作成を始めることができた。 (3) 大学と連携し保護者や地域から信頼される学校 ○居住地校交流の実施人数増（小学部8→10、中学部4→7） ○地域住民への学校紹介と福祉避難所の説明会を行い、学校だよりの配布先を広げた。ふようまつりへの外部からの参加者約100名。</p>	<p>(1) 安心・安全な学校 ○地域と連携した防災体制づくりも必要ではないか。 (2) 一人一人が伸びる学校 ○ステップアップを考えた授業や支援がなされている様子が伺える。 ○読書活動は児童生徒の成長にとっても大切であるので、充実させてほしい。PTAも協力読み聞かせ等で協力できるのではないか。 (3) 大学と連携し保護者や地域から信頼される学校 ○大学や地域の専門家といった人材を大いに活用することは、子どもたちにも良い事である。 ○卒業後の生活に向けた主権者教育や保護者への情報提供が大切である。 ○校外での子どもたちの作品展を開催してみるの良いのではないか。</p>	<p>(1) 安心・安全な学校 ○学校安全計画や人権教育全体計画に基づく実践を進め、安全教育、人権教育の充実を進める。 ○福祉避難所に関わる体制の整備充実</p> <p>(2) 一人一人が伸びる学校 ○個別の教育支援計画、指導計画を実際に運用しながら、より良い改善を進める。 ・関係機関との連携と役割分担 ・家庭との共通理解での活用 ・継続性、一貫性のある教育 ・自立活動、教育相談等の校内体制を整える。 ○読書活動の充実</p> <p>(3) 大学と連携し保護者や地域から信頼される学校 ○居住地校交流のさらなる拡大と充実 ○お便りやホームページを活用した情報の発信</p>
教育研究	<p>(1) 新たな研究テーマに基づく実践 ○新たなテーマ「児童生徒一人ひとりの確かな学びを育む授業づくり」に2か年計画で取り組み、11月に研究協議会と研究フォーラムを開催した。 ○教育研究フォーラムにおいて「静大プロジェクト」の研究成果を発表した。 (2) センターの機能の充実 ○教育実践事例集「Every One」第2集の発行。 ○地域の関係者向けに教育講演会を3回開催した。</p>	<p>(1) 新たな研究テーマに基づく実践 ○新学習指導要領の改訂に向けた視点を取り入れて、研究を進めることができた。共同研究者との連携をもっと深めていきたい。 ○教育研究論文入賞2件</p> <p>(2) センターの機能の充実 ○昨年に引き続き市内小中学校各2校ずつを取材した。今年度は通級指導教室の取材も行い、効果的な取組を紹介することができた。市内特別支援学級設置校に配布予定。</p>	<p>(1) 新たな研究テーマに基づく実践 ○大学には専門家がいたので、連携して取り組めると良い。 (2) センターの機能の充実 ○附属ということでも教育委員会からの情報が入ってこない部分は、こちらから求めていくことが必要である。</p>	<p>(1) 大学との連携を深めた教育実践 ○共同研究者との連携を深め、2年研究の実践をまとめ、研究協議会を通して地域に発信する。 ○大学や地域の人材や施設を活用した本校ならではの教育実践を行い、成果を発信する。 (2) センターの機能の充実 ○内外の優れた取組事例や最新情報をホームページ等を活用して広く発信する。 ○専門性向上のための研修会を開催し地域の人材育成を図る。</p>
教育実習	<p>(1) 教育実習 ○特別支援教育実習において事前に訪問する機会を設定したことで、実習期間を有効に使うことができた。 ○教育実習Ⅲで受け入れた学生が特別支援教育への理解や関心を高めた。 (2) 介護等体験 ○延べ127名の学生を受け入、多くの学生が特別支援教育に対するイメージが良い意味で変化したと回答した。 ○課題のある学生に対して大学と連携して対応することができた。 (3) その他 ○教職大学院生の実習を受け入れた。</p>	<p>(1) 教育実習 ○事前に学生と実習の準備ができたことは、実習期間を有効に使い、学生だけでなく指導教員の負担も軽減することができた。 ▲教育実習Ⅲについては不安を感じる学生が多く、事前の指導が必要である。 (2) 介護等体験 ▲学生の満足度は高かったが、新たに使用した体験録については、その意味合いが十分周知されなかった。</p>	<p>(1) 教育実習 (2) 介護等体験 ○特別支援教育に関する人材の育成という役割は大きい。 ○毎年見直しを行う中で、改善すべき点は修正していくことが大切。</p>	<p>(1) 教育実習 ○特別支援教育実習では実習生の増加に伴う体制の整備と内容の見直しを行う。 ○教育実習Ⅲにおいては、事前のガイダンスやオリエンテーションの工夫により学生の意識を高める。 (2) 介護等体験 ○事前指導の持ち方や体験録の使用方法などについて大学と確認し、学生への周知を図る。 (3) その他 ○教職大学院やアシスタントティーチャーの受け入れを積極的に行う。</p>